

節狀花山子子子

SM
1917



R



國生劉田岸十作馬實路小者市

あつち



大正六年十月二十五日印刷
大正六年十月二十八日發行

定價金壹圓參拾錢

著者 武者小路實篤

發行者 東京市麴町區有樂町一丁目三番地
松崎常次

印刷者 東京市神田區表神保町一番地
安田德治郎

印刷所 東京市神田區表神保町一番地
健捷堂

著作權
所有

發行所

東京市麴町區有樂町壹丁目參番地
阿蘭陀書房

電話本局一三〇九二三番
振替東京一四四八九番

花

咲

爺

(この一篇を小泉鐵兄に)

かちく山

一

(婆さんは爺さんの歸つて來るのを働きながら待つてゐる。其處に近處の兎がたづねてくる。)

兎

お婆さん、お婆さん。

婆

誰かと思つたら、兎さんか、よく來てくれた。暫らく顔を見せ

かちく山

一

なかつたね。

兎うさぎ。一寸病氣ちよつとびやうきをしてゐましたので。

婆は。それはいけないね、お爺ぢいさんもお前まへさんのことを時々心配ときどきしんぱいして

ゐなさつたよ。

兎うさぎ。さうですか、お爺ぢいさんはおたつしやですか。

婆は。たつしやにしてゐるよ、だが山やまに行いつてまだ歸かへつて來こない。も

う歸かへつて來きさうなものと思おもつてゐるのだよ。どうしたのだらうね。

兎うさぎ。本當ほんたうにもうちき日ひがくれますね。わるいものにでもお逢あひにな

らなければおよろしいが。

婆は。妾わかしもそれで今心配いましんぱいしてゐたのだよ。一寸留守番ちよつとるすはんしてくれないか。

一寸ちよつとさがしてくるから。

兎^{うさぎ}。お婆^{おばあ}さん。それより私^{わたし}が搜^{さが}して來^きて上^あげませう。山^{やま}までとんで

ゆくのは雜作^{ざさく}もありよせんから。

婆^は。さうかね。それでは氣^きの毒^{どく}だが見^みて來^きてもらはうかね。

兎^{うさぎ}。なにわけないことですよ。御遠慮^{ごえんりょ}には及^{およ}びません。それなら一^う

寸^{つと}さがして參^{まゐ}ります。

婆^は。せつかく來^きてくれたのにね。しかしお前^{まへ}さんも用心^{ようじん}おし、この

頃^{ころ}は物騒^{ぶつさう}だからね。

兎^{うさぎ}。大丈夫^{だいじやうぶ}です。それなら行^いつて參^{まゐ}ります。

婆^は。御苦勞^{ごくらう}だね。

(兎^{うさぎ}、とびながら退場^{たいぢやう})

婆^は。本當^{ほんたう}にあの兎^{うさぎ}はいつもかはらず親切^{しんせつ}ものだ。それもお爺^{おや}さんが、

あれが川におちたのを助けてやつたことがあるからその恩を今だに覚えてゐるのだらうが、恩を覚えてゐるのは感心な話ぢやないかね。

(爺さん狸をしばりつけひきづつて登場)

爺さん。婆さん。歸つて來たよ。

爺さんか、よく歸つて來なかつた。さぞおくたびれだらうね。

何にちつともくたびれはしないよ。それよりいゝ土産物をもつ

て歸てやつたよ。之御らん。

おゝ、立派な狸だね。よくそんなものがとれましたね。

あゝ、こいつが午睡してゐる處をつかまへたのだよ。狸じるで

もつくつてやらうと思つて持つて歸つて來たのだよ。

婆。さうですか、それはよう御座いましたね。しかし殺すのは可哀

さうですね。

爺。なに、之は人をだまして許りゐるわるい狸だから、殺す方がい

ゝのだよ。

婆。兎にはお逢ひになりませんでしたか。

爺。あゝ、あの可愛いゝ兎が来たか。どうしてゐた。

婆。病氣してゐたのださうです。そしてあなたのお歸りのおそいの

を氣にして、今あなたを捜しに出かけました。

爺。それは氣の毒なことをしたな。あいつは恩を忘れない感心な奴だ。

婆。さうですよ。誰にでも親切にしてやるものですね。

狸たぬき あいたし あいた。

婆は どうしたのた。

狸たぬき お婆おはあさん。手てが切きれさうだ。お願ねがひだから少すこし繩なはをゆるめて下くだ

さい。

婆は そんなことは出で来きないよ。お前まえは逃にげるつもりだらう。が逃にが

しはしないよ。

狸たぬき お婆おはあさんは今いま、誰だれにも親しん切せうにしてやるものだとおつしやいまし

たね。

婆は だが相あ手てによるからね。

狸たぬき 私わたしだつて命いのちをたすけて下くだされば、どんなことだつてしますぜ。

婆は。それが信しんじられゝば、すぐでもほどいてやるが。お前まえの根こん性じやうは

まがつてゐるからね。

狸たぬき

「だけどお婆おばあさん、私わたしだつてもとからわるいものではありませんよ。私わたしだつて自分自分を信用信用してくれるものにはそれだけの事ことはして見みせるつもりなのですが、誰だれも信用信用してくれないので、ついやけを起おこして、勝手かつてにしろと云いふ氣きを起おこすのです。元々もとわるいものぢやないのです。命いのちさへ助たすけて下くだされば兎うさぎなんかに負まけずに御恩ごおんをかへします。狸たぬきじるにして食くつたつて、食くつてしまへば食くはない前まへと同じぢやありませんか。ためしに生いかして見みて下ください。決けつしてわるいことはしません。又私またわたしのやうなものが、わるいことをした處ところが「どうせ大たいしたことは出で来きません。御慈悲おひびです。御助おたすけ下ください。」

婆は。お爺ぢいさん、どうしやうかね。泣ないてゐますよ。

爺ぢい。その言葉ことばがあてになりや許ゆるしてやつてもいゝが、あてになるかならないかわからないからね。

狸たぬき。お助けたすけ下ください。お助けたすけ下ください。御恩ごおんは一生しやうわす忘れません。

婆は。爺ぢいさん。助たすけてやらうかね。

爺ぢい。いたづらをする處ところを見ると随分ずぶん腹はらも立つがこの態さまを見みると、可か

哀あいさうになるね。

狸たぬき。お助けたすけ下ください。お助けたすけ下ください。命いのちの御恩ごおんは忘わすれるわけはありま

せん。いくら私わたしのやうなものでも。

(兎登場うさぎとうぢやう)

兎うさぎ。お爺ぢいさん。何時いつお歸かへりでした。

婆は。御苦勞ごくらうだつたね、お前まへが出るとすぐ歸かへつてゐらしたよ。この狸たぬきをとつて。

兎うさぎ。大きな狸たぬきですね。

爺ぢ。兎うさぎさん、暫しばらくだね。病氣びやうきだつたさうだね。もういゝのか。

兎うさぎ。えゝ、おかげでこの通とほり丈夫ぢやうぶになりました。一時じは助たすからないかと思おもひましたが。やつと助たすかりました。またこのやうにお月つきさまを見てはねられるやうになりました。

狸たぬき。お助たすけ下ください。お助たすけ下ください。

婆は。この狸たぬきが命いのちをたすけてくれと云いふのだがね。もうわるいことは決してしないと云いふのだがね。そして恩おんを忘われないと云いふのだがね。助たすけてやりたくもあるのだが、あとが怖こはいやうにも思おもふのだ

よ。あとさへこはくなければすぐでもゆるしてやりたいのだがね。
狸たぬき お助けたす下ください。お助けたす下ください。私わたしはどんなことしても生いきてゐたいのです。生いかしてくだされば私わたしはどんなに有難ありがたがるかわかりません。

爺ぢい。それはさうだらう。生いかしてもらへればいくらお前まへだつて夢中むちゆうでよろこぶだらう。だが時ときがたつとそんなよろこびは消きえてゆくからね。

狸たぬき。そんなことはありません。そんなことはありません。

爺ぢい。お前まへの云いふ言葉ことばが本當ほんたうなら、よろこんで助けたすてやる。もう狸たぬきじじるも喰くひたくないからね。だがあてにはならないからね。兎うさぎさん、お前まへさんもさう思おもふだらう。嘘うそつくこと切きり知しらない狸たぬきだからな。

鬼^{おに} お爺^{ぢい}さん、だけど殺^{ころ}すのは可哀^{かな}さうですよ。まさかゆるしてや

つてもわるいことはしないでせう。

爺^{ぢい}。それなら今日^{けふ}食^くふことはやめて暫^{しば}らく小屋^{こや}にでも入れて飼^かつて

おくか。それで狸^{たぬき}が本當^{ほんたう}に改心^{かいしん}したらその時^{とき}ゆるしてやるか。

婆^{ばあ}。それがいゝでせう。

爺^{ぢい}。それなら今日^{けふ}食^くふことは許^{ゆる}してやるよ。

狸^{たぬき}。ありがたう御座^{ござ}います。御恩^{ごおん}は忘れ^{わす}れません。

爺^{ぢい}。そのかわりわるいことをしたら、すぐ食^くつてやるからそのつも

りでゐろ。

狸^{たぬき}。畏^{かしこ}まりました。そのかはり悪い^{わる}ことをしませんでしたら、一生^{しやう}

食^くはないで下^{くだ}さいますか。

爺ぢやう それは食くはないでやるよ。

狸たねき ありがたう御座ございます。

爺ぢやう それなら裏うらの木きにゆはひつけてやらう。

(狸たねきをつれて退場たいじやう)

婆はな 狸たねきのやつ、ふだん嘘うそをつくもので、どうもあいつの云いふことは

あてにならない。あてにさへなれば逃にがしてやつてもいゝのだがね。
兎うさぎ 私わたしは逃にがしてしまう方がいゝやうに思おもひますよ。しばらくつけた

り、かごに入いれたりすると、又またうたがひ深ふかい狸たねきのことですから、

食くはれやしないかと思おもつて、すきがあると逃にげやうとしますよ。

婆はな 本當ほんたうは逃にがしてやつてもいゝのだが、逃にがすと、すぐ又また恩おんを忘わすれ

れて畑はたけをあらしたり、爺ぢやうさんをだましておどかしたりするからね。

一べんなんか爺さんがだまされてもう少しで川におちさうになつてやつと助かつたこともあつたのだよ。だからあてにはならないよ。

(爺さん登場)

爺　ゆはひつけてやつた。之から一つ逃げられないやうな丈夫な小屋をつくつてやらなければ。

婆　狸はよろこんでましたか。

爺　涙をこぼしてゐたよ。だがあいつの涙はあてにはならないからね。

鬼　お爺さん、許してやつたらどうです。飼ふのも大變ですよ。

爺　だがあいつはすぐ又いたづらをするからね。いたづらをしない